

ゆうかり放送委員会提供
ゆうかりに乾杯
 第119回放送の概要 (2017年3月25日放送)

パーソナリティ
 たろう
 (佃 由晃)
 なか
 (中嶋邦弘)
 かりん
 (妹尾優香)
 あな
 (岸本幸恵)



ミキサー
 門ちゃん
 (門田成延)

会計
 小山俊則

相談役
 わだかん
 (和田幹司)

1. ゲストコーナ (1) ファミリア元会長 坂野惇子さんの秘書 榎崎奈美さん

榎崎さんは1961年～1962年、高校2年生の時にAFSの留学制度でアメリカに1年間留学された。AFSは第2次世界大戦の時に、負傷兵を助けたことが発端で、戦争をなくし平和な世界を作るために何をすべきかを考え、若者の交流を行い、互いの理解を深めるために高校生の交換留学を始めた民間団体です (AFS: American Field Service 米国野戦奉仕団)。当時は文部省が試験を行い留学生を選んでいた。京都で1, 2次試験があり、3次は虎ノ門で行われた。日本からの留学生は123人であった。同期 (8期生) で有名な人は、国連大使、オーストラリア、オーストリア、デンマーク、カンボジア、スイスなどの大使を歴任されているなど、日本のリーダーになった方が多くおられる。

1961年を振り返れば戦後の復興が本格的に始まった頃で、アメリカとは生活レベルも全く違う時代であった。アメリカに関する情報も殆どなかったので、出発前にオリエンテーションが行われた。代々木公園にアメリカ軍の居住するワシントンハイツ内の高級将校の家族が住む、アメリカそのものという街があった。そこは日本の中のアメリカと呼ばれていた。家を見せてもらい、ベッドメイキングの仕方、バスの使い方を学んだ。“バス”と聞いた時は乗り物のバスと勘違いし、乗り方を教えてもらおうのかと思った。そこで研修を受け、アメリカ到着直後にはカリフォルニアの高校で1週間寮を借り切り研修を受けた。留学先はニューヨーク州バッファローで、ホームステイ先へはニューヨークのグレーハウンドのバスターミナルから8時間かけて、一人で行かなければならなかった。バスに乗っても間違っていないかドキドキし、乗車後も何人かに行く先を確認し、それでも心配で仕方がなかった。アメリカで一人になったのはその時が初めてで、途中のバス停で食事をした時、金額が聴きとれなく、財布から取ってもらったりした。4～5時間たって心配していた時、途中から乗ってきた女性が偶然ホームステイ先のお姉さんであった。シラキュース大学の休暇で家に帰るところで、日本から来たのかと尋ねられ、あなたのお姉さんよと言われやっとほっとした。その町では日本人は初めてで、新聞社の取材を受けた。共和党系の白人の町で、中心街には黒人も多く、工場地帯もあった。しかしその地域には行かせてもらえなかった。学校は1500人の

生徒がいたが、有色人種は榎崎さん一人だった。



ホストファミリー宅で取材受ける



ホストファミリー宅到着時の新聞記事

ホストファミリーや地域の人々の対応はすごくよかった。新聞で報道されたため、町の人が見かけると声をかけてくれた。ホームシックにはかからなかったが勉強は大変であった。高校は毎日同じ時間割のため、宿題が出ると翌日提出する必要があった。国語の宿題では100頁程の本を読み、レポートを書かされた。日常会話は問題なかったのに英語は出来ると思われていたようで、英語がわからないのでついていけないと先生に言うと、日本文学、日本語についてレポートを提出するように言われた。レポートをホストファミリーのお母さんがチェックしてくれた。しばらくして300頁程のパールバックの「大地」を完読した時、英語の自信がついた。その後急激に理解が進んだ。滞在1カ月ほどで日常生活には慣れた。初めの頃は高校生の早口のスラングがわからず、ホストファミリーのお父さんに相談すると、「心配はいらない～大丈夫！」自分もわからないので大丈夫と言われた。クラスでもスラングがわからないと言うと皆が教えてくれ、親切な数学の先生から授業中でもすぐに聞いていいと言われ、質問して納得出来ない顔をしていると、友達が先生にわかるようにもう一度説明するよう助けてくれた。

当時日本は敗戦国のイメージで、町の人も含め支えてあげようという気持ちが強かったと思う。フジヤマ、ゲイシャ、サムライ程度の言葉しか知られていなかった。AFSの資金集めのピザセールスで各家庭を廻った時、日本に来た事のある軍人が多く、沖縄にいたとか言って懐かしがられ、変なうる覚えの日本語で話しかけられた。ピザを沢山買ってくれた。新聞報道後戦争花嫁の方から電話がかかり、日本語を何十年もしゃべったことがないので家に是非来てほしいと言われた。ちらし寿司を作って待っていてくれた。言葉は水商売時代のブロークンイングリッシュのままであったが感じのいい人だった。子どもがお母さんを馬鹿にするような態度で、つらくて寂しいだろうと思った。

高校では毎週末はダンスパーティ、金曜日はフットボールの試合があり、ダンスパーティは夜の8時から夜中まで続いた。勉強だけするのはダメで、社交と両立しないと学校では人気者になれない。土曜日に宿題をしていると、何をしているのと言われた。



親友のエレンと兄アルピン



卒業式の日 父と母

1年間の留学生活の最後に国内バスツアーがあり、西部ニューヨーク州に来ている各国の留学生が集まり、榎崎さんのバスには30カ国ほどの留学生が同乗していた。ボストンではパトカーが先導し、ホワイトハウスでは当時のケネディ大統領のスピーチを聞くことが出来た。敗戦国のドイツ、イタリア、日本の生徒が多かったように思う。

John F. Kennedy 大統領のスピーチの概要の一部

皆さんを今日ここホワイトハウスにお迎えすることを大変うれしく思います。
皆さんは留学中、アメリカ合衆国で私たちのことをじっくり見てこられたことと思います。
見たありのままを母国に帰ったら伝え、アメリカと皆さんの国の懸け橋になってください。
私達は今、最も困難な時期に重大な責任を担っています。
将来それぞれの国でリーダーシップを担うであろうみなさんをお招きすることが出来て、
アメリカの大統領として光栄に思います。
そして、今日のホワイトハウスに集まった皆さんの中から、大統領や首相が誕生して、
いつの日か新しく誕生した大統領がまたお迎え出来ることを期待しています。
その時には「私は昔ここに招かれてきたことがあるのですよ。」と伝えてください。

(注) ケネディ大統領の1963年7月18日のスピーチが以下のyoutubeにアップされています。

<https://www.youtube.com/watch?v=1Ks8nCGZPeM>

2. ミュージック：東北と神戸をつなぐ歌「充(みち)」

作詞：玉津中学校 66 回生 作曲：PASSION OGURA この曲は「音楽事務所オフィス魂(KON)」さまのご厚意でお送り致しました。

3. ゲストコーナー（2）

1983年、榎崎さんはファミリアでの勤務を始めた。朝日新聞に阪急梅田店の店員募集の広告が掲載されていたのを見て応募し、英語が喋れること、当時外国人客が多かったことから元町本店に配属になった。ファミリア創業者は、坂野惇子さん、田村江ツ子さん、田村光子さん、村井ミヨ子さんの4人である。朝ドラでは看護婦が創業者の一人として入っているが、創業者に看護婦はおらず、実際にいた看護婦は先生と呼ばれていた大ヶ瀬久子さんであった。当時岡本にあった外人村に坂野夫妻が住むようになり、外国人専門のベビーナースの大ヶ瀬さんと知り合いになった。その当時坂野通夫さんは大阪商船に勤めており、英語も堪能で、夫妻は外国の生活様式、育児法を学んだ。坂野惇子さんは1942年に出産され大ヶ瀬さんのお世話になった。



ファミリアビル



ファミリアビル

日本は育児法が遅れており、戦後の育児環境も悪く、日本とは違い外国では育児法は重要なものと認識されていた。日本が遅れていた点は、例えば日本のおむつは体を圧迫するもので、生地は浴衣を長細く切ったものを疳きつけるようにしていたので、股関節を締め付けることになり、当時は股関節脱臼が非常に多かった。西洋式のおむつの当て方で股関節脱臼は減った。



ファミリアの品質へのこだわりは凄いものがある。特におむつの開発には力を入れた。坂野惇子さんは大手の繊維業界に呼び掛け、風は通すが水は通さない着心地の良い生地の開発にこだわった。ひたすら赤ちゃんにとっていいものを作りたい一心を徹底していた。今アメリカファースト、都民ファーストと言っているが、ファミリアは、ベビー(子ども)ファーストを創業当初から目指していた。戦後の物が無い時代に、子ども、お母さんのことを第一に考えてきたのは素晴らしいことだと思う。4人の創業者はみなさん財閥の出身でいいものをよく知っていたこと、坂野惇子さんのお父さんの佐々木八十八さんは佐々木営業部(後のレナウン)の創業者で繊維業界であったこと、ファミリア創業時戦前の輸入生地、刺繍糸が軽井沢の別荘にたくさん残っていたことが幸いした。坂野通夫さんが南方の戦地から復員し、これからの時代

は女性も男性と同じように働かないといけない時代だと言って女性の背中を押した。佐々木八十八さんも女性が働くことを勧めた。坂野通夫さんは先を見通す眼があり、輸入品はみな通夫さんが見つけていた。

通夫さんは社内でも女性を大事にする方で、当時の他の会社とは違っていた。社内では創業者を含めお互いを役職で呼んでいた。女性の働きやすい職場とするため当初から復職制度があり、子育てで忙しい期間は一度退職し、子育てが終わると復職できる。子育ての経験があるので復職後も活躍出来ることになる。店頭でもお客さんに適切なアドバイスが出来る。復職しお客様や社員たちの相談役になることもある。会社の方針が若い人に的確に継がれていく効果の大きい制度である。



商談中の坂野惇子さん、榎崎さん



坂野惇子さんと秘書仲間



坂野通夫さんと榎崎さん



坂野夫妻と榎崎さん

坂野通夫さんが社内で常に言い続けていたのは、「3格（人格、店格、品格）」で、品のよいもの、上質なものを常に目指している。人気のスヌーピーを日本で最初に輸入したのはファミリアで、坂野夫妻の娘の光子（てるこ）さんが、アメリカ留学時流行っていたので持ち帰り、通夫さんは売れる商品であると確信し、輸入が難しい時代であったが、通夫さんは領事館他を走り廻り、原作者のシュルツさんとも親しくなり、自宅も訪問している。

阪神大震災時ファミリアは、岡崎晴彦社長が我々は生き残って生かされたのだから、神戸の皆さんにはこれまでお世話になってきたので、神戸の皆さんにお返ししないといけないということで、会社にあった

子ども服、ベビー服などのあらゆる商品を被災者に届けた。社員も被災していたので、セールス部員が自分の住んでいる地域の避難所（小学校が多かった）に自転車で届けた。女性社員が集まりサイズごとに区分けし、神戸市を通すより直接届ける方が早いということで社員が配達した。水木小学校に行った時に裸足の男の子を見たことを報告すると、社長の指示でありっただけの靴と靴下を配ることになった。1ヶ月間仕分け作業をしていた。避難所に配達した人が足りない物を聞き対応した。

被災した幼稚園、保育所を、イベントで使用している着ぐるみのファミちゃんとプレゼントをもって訪問した。社員が一人ひとり違うバースデーカードを作成した。訪問することを先方に伝えるとうれいですと答えて頂いた。天井の崩れた幼稚園、庭にガレキが積まれ幼稚園もあり、子供達が本当に喜んでくれた。



保育園訪問



幼稚園訪問



社員手作りのバースデーカード



社員手作りのバースデーカード

坂野惇子さんは、子どもがはしゃぐようなところがありながら、仕事に対しては非常に厳しい人であった。朝ドラのような、なよっとした優しさではなく、惇子さんの前では皆が緊張していた。人脈は広く常にファミリアのためにがモットーであった。当時女性経営者はめずらしく、ゴルフに行った時にいいスコアを出すと周りの男性は、やはり商売女は違うなと言われ非常にショックだった。他にも色々あったがめげずに頑張ってきたと、榎崎さんにぽろっと話すことがあった。当時の女性経営者は大変だった。

坂野通夫さんは、朝ドラとは全く違い、非常に明るく社交的、おしゃべりが好きで、外交的、ファミリー一番のセールスマンと言われた。人を見ると話しかけ、ガードマン、運転手、掃除の人にも必ず声をかけ、大変やな、ありがとうといつも言っていた。皆から慕われ信頼されていた。通夫さんの葬儀では男性社員は皆泣いていた。外部の参列者がそれを見て、経営者が亡くなって泣いている男性社員がこんなにいるのは初めて見たと言われた。厳しかったが非常にやさしい人であった。惇子さんを大事にされ、オシドリ夫婦であった。

番組参加者の河野真紀さんの感想は、親にとってというより赤ちゃん・子供にとっていいものという思いについては、自分が子育てをして子どもと向き合っているとそれが一番大事である事に気づき、そうしてあげたいと思ったので、坂野惇子さんはその感覚が母親になることで気づかれ取り組まれたと感じました。

5. 地域瓦版

新長田にご当地映画が誕生しました。ローカル怪獣ムービー「大災獣ニゲロン」です。300年に一度現れるという大災獣ニゲロンが神戸に上陸。破壊の限りを尽くそうとするニゲロンに、「二毛留（にげる）家」が立ち向かいます。大災獣ニゲロンを大災害に見立てて災害時に適切な避難行動をとという防災メッセージが込められた真面目な映画です。

4月9日（日）に完成披露上映会が、ハーバーランドのK-waveで行われます。18時30分開演、入場料2000円です。

ゆうかりに乾杯の過去の放送音声と文書化した放送概要は、下記URLで視聴いただけます。

<http://yukarihyogo.jp/>